日本IT書紀

007 下天のうち

02 溟渤篇
巻之一 契機

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第七

下天のうち

一

二〇〇一年三月、大川功氏が東京・新宿の病院で心不全のため死去。七十四歳だった。

大阪計算代行、日本計算センターを経てコンピューターサービス（ＣＳＫ）を設立し、創業十四年にしてソフト業として初めて株式を上場した。〝語り継ぐ経営〟が全国に散った弟子たちに受け継がれ、実践されている。経営指針を示し、あるいは個性を訴えるための著作は数多いが、客観的な評価はまだ世にない。

二〇〇二年八月、北川宗助氏が亡くなった。

黒澤商店、日本ワットソン統計会計機械、統計研究所、連合国軍総司令部（ＧＨＱ）戦略爆撃調査団、在日米軍立川基地ＰＣＳ部隊、日本ビジネス、日本ビジネスコンサルタント（ＮＢＣ：のち日立情報サービス）、日本情報開発（のちエヌ・アイ・ディ）という一生を通じて、この人物について語る書籍は自身が口述した『情報産業・この道六十年』でしかない。同氏のもとから巣立って行った多くの人々が参集し、命日を期して「偲ぶ会」を催している。

二〇〇三年の一月、水野幸男氏が胃がんのため永眠した。日本電気のコンピュータ事業に草創期から参加し、情報処理営業計画本部長、コンピュータ支配人兼基本ソフトウェア開発本部長・情報処理営業計画本部長を経て代表取締役副社長。ソフトウェア工学の第一人者でもあった。

インターネットで検索すると八十件以上のヒットがあるが、事跡を伝えるのは情報処理学会のＷｅｂサイト「コンピュータ博物館」の〈日本のコンピュータパイオニア〉のみである。

二〇〇四年四月二十八日、ＴＤＣソフトウェアエンジニアリングの社主である野崎克己が亡くなった。このことは前節で書いた。

人に限らず、生あるものはいつか、必ず死ぬ。

ＩＴ分野向け書籍の出版で知られるコンピュータ・エージ社の広瀬正美氏によると、

――回顧の時期である。

という。

同社はこれまでに『起業家ビル・トッテンＩＴビジネス奮戦記』『情報サービス産業人物列伝・ソフトウェアに賭ける人たち』『空翔るＭ＆Ａ経営ソラングループ総帥北川

淳治』などを出している。社史に代わる自叙伝的な企画がいくつか進んでいる。

――情報産業人物列伝というかたちで、シリーズ化できればね。

確かな手ごたえを感じているようだった。

この国に情報処理やプログラム作成の仕事が「業」として成り立つようになったのは一九六〇年代である。「コンピュータは体に悪い」だの、ソフトといえばソフトクリーム、ソフト帽の時代である。

経済産業省の特定サービス産業実態調査によると、二〇〇二年度の情報サービス産業の売上高は十三兆九千三百七十一億円、就労者は五十六万九百八十二人であるという。企業の数は一口に言えば七千社だが、九千社、いや一万二千社という調査結果もあって確定はしていない。

ようやく全体の売上高が一兆円に達し、

――西暦二〇〇〇年には十兆円産業。

と夢を語っていたのは、つい二十年前である。これほど短期間にこれほど成長した産業は他にない。

その第一世代が現役を引退する。

有態に言えば、数年内に多くの人が鬼籍に入る。

――いま聞いておかなければ、記録に残せない。

それは確かにそうであろう。だが、記録に残す、とはどのようなことか。

二

新聞社に勤めていた当時、ほとんどは唐突に数人の学生がオフィスを訪ねてきた。「情報」「ＩＴ」をうたった学部、学科がにわかに開設され、自ずから社会に臨む若者が増えた。卒業論文を書かねばならない。

――情報産業を総覧できる資料がどこかにありませんか。

多くはそういう〝迷える仔羊〟である。

――神田の古本屋街で探しても、報告書の類はありませんから。

国会図書館や中央官庁の資料室、業界団体の図書室などにあるではないか――というのは、この場合、通用しない。彼らはその手立てを知らないし、どこにどのような資料があるかという所在情報を得ることができない。

さらにいえば、そのような資料、文献はどこを探してもない。

――いつか彼らの参考になる資料集をまとめておこう。

と考えたのは、〔下天のうち〕を意識し始めたころだった。いずれ後進に道を譲るときがくる。

〔下天のうち〕とは、信長が好んで謡い舞ったことで知

られる。

人間五十年
下天のうちをくらぶれば
夢まぼろしのごとくなり
ひとたび生をうけ
滅せぬもののあるべきや

正しくは謡曲『敦盛』の一節であって、文学的に解析すれば「末世の諦観」ということになるのではあろうけれど、筆者の場合、節目の意味でしかなかった。その年がやってきたのだが、社の都合もあって踏み切れないまま、忙しいだけの日常が繰り返され、時が過ぎた。

ここでいう日常とは、毎朝八時までにオフィスに出て主要な一般紙と産業紙に目を通し、記者の一人ひとりにその日の指示を与え、作業のスケジュールを組み、自身の記事を仕上げ、かつ面担当が上げてくる記事を校閲し、配置と見出しを確認し、場合によっては全面的にやり直す。

活字として世の中に出す以上、内容を吟味しなければならない。曖昧な部分や不明な点を確かめ、前後矛盾する記述を訂正し読みやすく分かりやすい文に仕上げる。そういう日常が果たしてジャーナリストの仕事といえるか、という疑問が根底にあった。

二〇〇三年の一月、にわかな事情が生じた。

それというのは、実は五十という歳でフリーランスになる腹を固めていた。ミレニアムの年の晩秋、事務所の近くにある老舗の鰻屋で、社のオーナーにその話をした。

オーナーは

――それはあるまい。

とは言わなかった。

――ダメだ、許さん。

とも言わなかった。

――オレもお前に同じことを言いたかった。

七十五を機に引退して、ハワイで悠々自適を決め込むつもりだった、という。しかしお互い、いきなり、というわけにはいかない。

――七十五まであと三年ある。それまで付き合え。

そう言っていた人が、一年半後、にわかに倒れた。

入院した三か月後、あれよあれよという間に儚くなった。

フッと気が抜けた。

日常が日常であることが唐突に色褪せてきた。

オーナーの株式を引き継いだ人とうまくやるつもりもなかったし、闘うつもりもなかった。当初、ソフトランディングということを考えていた。緩やかに高度を落とし、静

かに着地してエンジンを停める。ところが気がついたとき、知らないところで罷免の手続きが行われた。

いきなり目の下に山肌が見えた。

失速というより墜落に近い。

ゴールデンウィークが明けた初日だった。

取材を終えてビルの外に出たのは、午後四時を少し回っていた。朝からどんよりした曇り空だったが、かすかに日が射していた記憶がある。そのとき季節外れの台風が沖縄諸島に近づいていたのではなかったか。

ビルを出たとき、強い風に煽られた。突然のように

「メイ・ストーム」

という言葉と

「こころざし」

という言葉が浮かんだ。

二つの言葉がどう結びついたのか、うまく説明できない。ともあれ、「メイ・ストーム」だの「こころざし」だの「下天のうち」だのが、渾沌の宇宙にポッカリと誕生し、急速に凝固していくのが分かった。

コンピュータの歴史というのではない。

ソフトウェアと情報サービスというのでもない。

企業や人に照準を当てるのでもない。

そうではない〝何か〟をまとめ、書き上げなければならない。あたかも自分に課せられた義務であるかのように思えてきた。

三

情報産業の専門紙に長く籍を置き、週刊であることを忘れて日刊紙と特ダネを競い、取材に飛び回ることが面白かった。それを虚しく感じるようになったのは、厭いたということである。

日常に厭いた者が日常を差配していいはずがない。道を譲らなければ、後進はいつまでも「部下」であり続けなければならない。

卒論であるとすれば、何をテーマとするのか。

繰り返しになるが、コンピュータの歴史というのではない。

いつ、どのようなコンピュータ（ハードウェア）が、どのような技術を備え、何という人によって設計され、世の中に提供されたか、ということについては、ほかに優れた専門の書がある。

また、ソフトウェア開発や情報処理サービスに限った歴史というのでもない。

あるいは、人物に焦点を当てた伝記でもない。

――でき得れば……。

と思ったのは、〝情報化〟を軸にした社会・産業・文化・生活の歴史を描くことである。この考えが正しいかどうか、自分にできることかどうかは、とりあえずどうでもいい。

やるか、やらないか。

当時、発表資料のままに原稿を起こすのは記者の仕事ではない、というように筆者は考えていた。仮に資料ベースで書くにしても、何かしら自分ならではの独自性を出したい。要するに、「取材のための取材」はしない。

――こんど会おうよ。

――ええ、いいですね。

という感じで、企業や業界団体の人々と会い、世間話（というか交友や裏話を種にした雑談）を交わす。その中から「ネタ」を拾うのである。

会う場所は相手のオフィスであったり、ホテルのレストランで昼食をとりながらであったり、仕事が終わったあとの一杯飲み屋であったりする。

そのつどメモを取ったのでは相手は話してくれないし、こっちも面白くない。愚痴を聞き、あるいは自分の考えを述べ、業界のウワサ話に花を咲かせ、拾った「ネタ」を改めて取材する。つまるところ、記者という職業は聞き上手でなければ務まらない。さらに記憶力と想像力があればなおいい。

あっちで聞いた話、こっちで得た情報を組み合わせ、類推し、まだ公表されていない計画や構想を引き出す。自分の推理通りだったり、〝当たらずといえども遠からず〟だったときは独りニンマリする。聞いたままを文字にするのだから、物語を創出する作家と比べ楽な職業であろう。

その者が、思いあがりの末に

――情報化を軸にした社会・産業・文化・生活の歴史。

なるものを描こうと企んだのだから、突飛ではあった。しかもこの者は、「下天のうち」などと嘯いているのだから性が悪い。

売れるか、ということは眼中にない。商業ベースで考えれば、特定の企業なり、個人なりに照準を絞り、どれほどが捌けるか事前にソロバンを弾くであろう。だが性の悪さが嵩じて、ついに

――いっそのこと博覧強記の原稿を書き上げるか。

と思い立った。つまり知り得ることを調べ、調べ得ることを知ろうというのである。

〜〜〜〜　補　注　〜〜〜〜

日本計算センター　一九六〇年東京・芝公園に加毛秀明が創業した。七九年十月、社名を「サイコム」に変更した。

黒沢商会　黒澤貞次郎が一九〇一年東京・京橋に開いた事務機器・用品販売業「黒澤貞次郎商店」が前身。一九〇七年「黒澤商会」と改称し、森村商事からホレリス型パンチカード式統計会計機械装置の国内総販売権を引き継いだ。一九〇七年鉄筋コンクリート造三階建ての本社ビルを建設した。

『パイオニア紹介』　情報処理学会が作成している。その選考対象は同学会の会長もしくは学会活動に貢献した人物であって、二〇〇四年八月現在、掲載されているのは次の各氏である。

相磯秀雄、安藤馨、天羽浩平、雨宮綾夫、猪瀬博、飯島泰蔵、池田敏雄、池野信一、石井治、石井善昭、浦城恒雄、榎本肇、尾関雅則、尾見半左右、大泉充郎、大島信太郎、大野豊、岡崎文次、金田弘、萱島興三、喜安善市、岸上利秋、北原安定、清野武、小林大祐、後藤英一、後藤以紀、駒宮安男、坂井利之、塩川新助、嶋利男、城憲三、末包良太、清宮博、高崎勲、高島堅助、高田昇平、高橋茂、高橋秀俊、出川雄二郎、戸田巌、中澤喜三郎、中嶋章、西野博二、野口正一、萩原宏、渕一博、穂坂衛、松崎磯一、松下重悳、三浦武雄、水野幸男、三田繁、南沢宣郎、宮城嘉男、村田健郎、室賀三郎、元岡達、森口繁一、安井裕、山下英男、山内二郎、山田博、山本欣子、山本卓眞、和田英一、和田弘。

日本IT書紀　007 下天のうち

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。